

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

福沢桃介翁生誕150年記念 福沢桃介  
名古屋電灯(株)から電力王への道を進む

福沢桃介が名古屋電灯に直接関わるようになったのは1909(明治42)年に株主名簿に初登録され、顧問に就任したことから始まる。1910(明治43)年1月に取締役、6月に常務取締役に就任した。当時、会社には社長制がなかったので事実上の社長となって実権を握った。さらに桃介の活躍ぶりは当時反名古屋電灯を旗印に地元の有力実業家と相談役で大株主の渋沢栄一、馬越恭平、雨宮啓次郎などの肝いりで設立されていた名古屋電力(株)との合併をわずか2週間でまとめ上げた。この合併で力を見せたことが、逆に地元の反対派の警戒心をあおり、同年11月に常務を辞任した。



福沢桃介

1868(明治元)～1938(昭和13)年  
出典：福沢桃介翁伝  
名古屋電灯株式会社応接室の  
福沢桃介(1915(大正4)年:48才)

桃介を追い出した名古屋電灯は事業が拡大する中で1911(明治44)年4月に、増資(資本金:1600万円)と社長制実施を決議し、初代社長に加藤重三郎名古屋市長を迎えた。加藤は市長を辞して経営に専念したが業績は上がらず、株価も低迷し、桃介に経営刷新を求める声が高まった。

再度、1912(大正元)年12月に経営陣に加わった桃介は、大正2年2月に常務(社長代理)、大正3年12月に社長に就任、その後、名古屋電灯が1921(大正10)年10月に関西電気(株)と合併し、引続き社長に就任、同年12月に相談役になり、辞任した。

なお、福沢桃介は名古屋電灯取締役として経営する傍ら、千葉県郡部選出の衆議院議員(政友会所属)として1912(明治45)年5月から1914(大正3)年12月までの1期、活躍した。桃介が1期代議士を勤めたのは今後の水力開発を促進するため政界に太いパイプを持つことが必要だと考えてのことであった。

今月号は、福沢桃介が名古屋電灯在任中に活躍した功績を紹介する。

## 名古屋電灯の発電所

わが国の電気事業が明治から大正時代にかけて火力から水力への大転換を図った。水力発電技術の進歩、長距離送電に加え日露戦争後の石炭価格の高騰が水力発電に拍車をかけた。

名古屋電灯においても資料1の通り、長良川発電所、八百津発電所を建設し名古屋市内の3火力発電所を廃止した。この時期に名古屋電灯の社長として福沢桃介が登場した。

## 資料 1：名古屋電灯時代の発電所

西暦	和暦	発電所名	出力(kW)	備 考
1889	明治22	南長島発電所	100	明治36年廃止
1895	明治28	下広井発電所	60	明治37年廃止
1901	明治34	水主町発電所	300	大正6年廃止
1907	明治40	小原発電所	200	東海電気を合併、承継
1908	明治41	巴川発電所	750	東海電気着工後合併
1910	明治43	長良川発電所	4,200	
1911	明治44	八百津発電所	7,500	名古屋電力を合併、承継
1915	大正4	熱田火力発電所	3,000	1号機
1916	大正5	八百津放水口発電所	1,200	放水落差活用
1918	大正7	熱田火力発電所	10,000	(常時7,000kW、予備3,000kW)
1919	大正8	賤母発電所	16,400	木曾電気興業より受電
1921	大正10	串原発電所	6,000	木曾電気興業より受電

### (1) 長良川発電所の建設

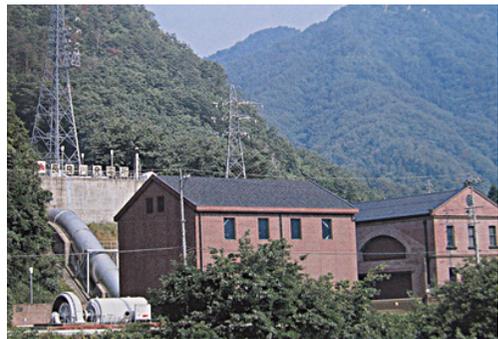
1910(明治43)年、名古屋開府三百年記念事業として3府28県連合による第10回関西府県連合共進会が鶴舞公園を会場にして開催された。会場には本館、特許館、機械館などの建物、噴水塔、奏楽堂などが設けられた。そして共進会の各パビリオンには25,800余のイルミネーションを取付け、この工事を名古屋電灯が請負い、長良川発電所の建設工事を間に合わせた。この頃の俗謡に

「清き長良の水上に 築き上げたる発電所  
あれが名古屋の夜を照らす 粋な明かりの  
元かいな」と唄われた。

長良川発電所(出力：4,200kW)は1908(明治41)年6月工事着工、1910(明治43)年3月14日送電を開始した。発電所から児玉変電所までは33,000vの特別高压送電線で、木曾川横断部分にわが国で初めて鉄塔を使用し、高压送電時代の幕開けとなった。なお長良川発電所の完工によって従来の主力発電所であった水主町発電所は予備火力となった。

### (2) 検査役選任問題

名古屋電灯は1907(明治40)年、長良川発電所の工事資金調達に400万円の増資を計画したが、日露戦争後の株式市場は暴落し払い込みが進まなかった。このため会社財産を担



長良川発電所：名古屋電灯最初の水力発電所、2000(平成12)年に本館建物、2001(平成13)年に発電所関連施設が登録有形文化財

所在地：岐阜県美濃市立花

運転開始：1910(明治43)

出力：4,200kW→4,800kW(昭和57年増設)

保に明治生命から30万円、東京海上から20万円、合計50万円の大口融資を受けた。そして同発電所の工事に着手した。

当時の名古屋電灯では、業績の低下に不満を持つ株主によって「革新会」と称する派閥が形成され、反対に経営陣を支持する株主によって「同盟会」と称する派閥が組織され社内の主導権争いが発生していた。こうした混乱の中、翌年の明治41年7月に開催された臨時株主総会で、86名の株主が工事資金50万円の借入れに関する不信任や社員に不正事

件があったとされ「会社財産の運用に関し調査すべし」と検査役選任の申請が名古屋地方裁判所に提出された。裁判所はこの申請を認め、矢田績(三井銀行名古屋支店長)、大喜多寅之助(弁護士)、山田豊(弁護士)の3名を検査役として任命し業務内容の調査に当たさせた。実態を調べてみると会社財産の運用に少しも不正はなく事業そのものも堅実であった。そして矢田績は、長良川発電所が完成し、旧来の営業を改め、事業を伸ばしていけば成長すると考えていた。

こうした財務状態などの調査が進んでいる前後、福沢桃介による名古屋電灯株式の買収が行われていた。この買収には桃介が勤務していた北海道炭鉱時代から取引があり、地元名古屋で愛知石炭商會を經營する下出民義を介して進められた。

福沢桃介は1909(明治42)年2月に来名、矢田績、下出民義と会った。矢田、下出の両者は名古屋電灯会社の現状および将来の見込みなどを説明、事業進出について打ち合わせを行った。そして福沢桃介は初めて株主名簿に登場、顧問に就任した。引続き明治43年1月に取締役、5月に常務取締役に就任した。

### (3) 名古屋電力の合併

名古屋電力(株)は1909(明治42)年に資本金500万円で設立され、奥田正香が取締役社長に就任し、岐阜県八百津町の木曾川水系・八百津発電所(当初：木曾川発電所)の建設を始めた。名古屋電力が開業し名古屋方面に供給すると名古屋電灯にとって著しい脅威になるとみられたが、実際には深刻な経済不況に直面し、巨額の資金調達に困難をきたしていた。また、名古屋電灯が名古屋市と電柱の建設に関する報償契約を締結していたので、名古屋電力の市内供給は地中線に頼らざるを得ないという問題に直面していた。名古屋電力のこういう状況を見て取った名古屋電灯の当時常務取締役であった福沢桃介は名古屋に滞在し、わずか2週間で名古屋電灯より大きい



八百津発電所：木曾川で最初の発電所。名古屋電灯一関西電気一東邦電力一日本発送電一関西電力を経て1974(昭和49)年に運転休止1988(昭和63)年に八百津町郷土資料館として開館。

所在地：岐阜県加茂郡八百津町

運転開始：1911(明治44)年

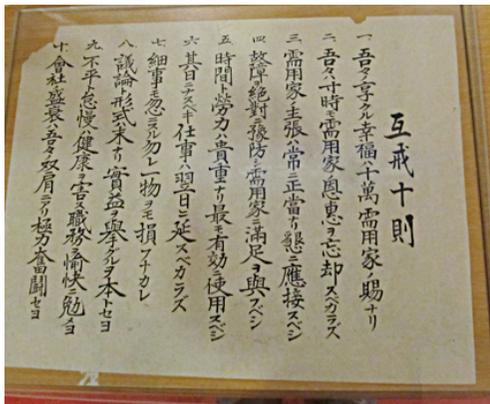
出力：7,500kW—8,700kW(大正6年)—11,000kW(大正13年)

名古屋電力との合併をまとめ上げ、資本金も525万円から750万円へ増資した。

### (4) 経営陣の一新

名古屋電力との合併を審議する名古屋電灯の株主総会は1910(明治43)年8月26日に開催された。総会は福沢桃介の進出を歓迎する革新会を改め「電友会」と、福沢系の経営陣を不安視する守旧派の同盟会改め「愛電会」とが対立、両陣営の株主が分裂、收拾がつかなかった。名古屋電力との合併については同年10月28日に成立、しかし役員数改正案は決選投票の結果、賛否同数で議長一任(福沢常務)となった。福沢常務は暫時冷却期間を置くこととし、その後、同年11月に両派の折衷案を持って7取締役(このうち名古屋電力より上遠野富之助、兼松熙、斎藤恒三の3取締役増員)、4監査役(このうち名古屋電力より神野金之助、桂二郎の2監査役増員)を決議、兼松熙を常務に選任し、福沢桃介は自ら常務取締役を辞任した。そして1911(明治44)年4月、資本金を1,600万円に増資と社長制実施について決議し、初代社長に前名古屋市長の加藤重三郎を迎えた。

しかし新発足した名古屋電灯の業績改善は



互戒十則と大正時代の電工さんの半被  
(資料提供: でんきの科学館)

はかどらず、配当の大幅引き下げで株価が低迷し、福沢桃介に再度出馬を求める声が高まった。また、1913(大正2)年に加藤社長、兼松取締役などの首脳が名古屋大須遊郭の稲永移転に絡む疑獄事件で起訴され、この取調べで執務できなくなったため、加藤に代わって福沢が社長代理となった。その後、加藤は無罪となったが社長を辞任、福沢桃介が社長に下出民義が常務に就任した。以後、福沢が人事・金融を担当し、日常業務の大半を下出常務が代行するという経営体制となった。

#### (5) 福沢社長の経営改革と互戒十則

1914(大正3)年、社長に就任した桃介は士族の商法として批判の多かった名古屋電灯

のサービス向上を図るため、自ら筆を執って「互戒十則」を定め従業員の意識改革を図り経営再建に取り組んだ。その内容は次の通りで現在でも相通じるものが多い。

- ① 吾々の享くる幸福は十萬需要家の賜なり
- ② 吾々は寸時も需要家の恩恵を忘却すべからず
- ③ 需要家の主張は常に正当なり、懇ろに承接すべし
- ④ 故障を絶対に予防し、需要家に満足を与うべし
- ⑤ 時間と労力は貴重なり、最も有効に使用すべし
- ⑥ その日に為すべき仕事は翌日に延ばすべからず
- ⑦ 細事もゆるがせにする勿れ、一物をも損なう勿れ
- ⑧ 議論と形式は末なり、実益を挙ぐる本とせよ
- ⑨ 不平と怠慢は健康を害す、職務を愉快に勉めよ
- ⑩ 会社の盛衰は我々の双肩にあり、協力奮闘せよ

その他、集金員の歩合制の導入、電気料金の銀行振り込みの採用、不要不急の在庫品の削減、圧縮を図った。

#### (6) 新事業の拡大策と電源開発の推進

福沢桃介は積極的な需要開拓に取り組み、また自ら出資して新たな製鉄事業を起業する新事業を展開した。

1914(大正3)年に欧州から帰国した寒川恒貞技師に対して、余剰電力を活用した電気工業の調査を命じた。調査は熱田火力発電所の構内で始まり、翌大正4年に社内に製鋼部を設け、大正5年に製鋼部を独立させ(株)電気製鋼所(資本金：50万円)が設立した。さらに1917(大正6)年に社内に製鉄部を設け、翌年に木曾電気製鉄(株)(資本金：1,700万円)を設立した。

また、1914(大正3)年の同時期に杉山等、石川栄次郎、藤波収などの人材を集め臨時建設部を設け、木曾川、矢作川水系の調査を始めた。そして1916(大正5)年に賤母発電所、串原発電所の建設に着工した。その後、木曾電気製鉄の創立以降、名古屋電灯の臨時建設部を継承し、一切の電源開発を担い、賤母発電所は1919(大正8)年、串原発電所は1921(大正10)年に竣工させた。これにより名古屋電灯は同社より電力の卸売りを受ける体制となった。

一方、渇水時や冬季渇水期の供給力不足にならないよう1915(大正4)年に熱田火力発電所(当初出力:3,000kW)を建設した。その後、第1次世界大戦中の需要増加に対応するため1917(大正6)年に4,000kW、翌年に3,000kWを増設し、総出力10,000kW(常時7,000kW、予備3,000kW)の発電所となった。

なお、資料2は名古屋電灯の新事業の拡大策と電源開発の関連を年表にまとめたものである。

資料2：名古屋電灯の新事業拡大策と電源開発の関係年表

西 暦	和 暦	◎新事業の拡大策 ※電源開発の推進
1914	大正3	※臨時建設部を設置し木曾川、矢作川水系の調査開始
		◎寒川恒貞に余剰電力を活用した新規事業策検討を依頼
1916	大正5	◎電気製鋼所設立(熱田火力発電所内)
		※賤母発電所、串原発電所建設着工
		※熱田火力発電所1号機(出力3,000kW)運転開始
1917	大正6	◎社内に製鉄部設置
1918	大正7	◎木曾電気製鉄所設立・翌年、木曾電気興業に改称
		※串原(仮)発電所(出力:2,000kW・本発電所建設中に発電)
		※熱田火力発電所1・2・3号機(常時7,000kW、予備3,000kW)
1919	大正8	※大阪送電所設立
		※賤母発電所(出力:16,400kW竣工)
1920	大正9	※大阪送電が木曾電気興業と日本水力の両社を合併
1921	大正10	●関西電気(株)創立(=名古屋電灯と関西水力電気が合併)
		※大同電力(株)創設-木曾電気興業(木曾電気製鉄を改称)、日本水力を継承
		◎大同電力の電気製鋼部門を分離して大同製鋼(株)設立
1922	大正11	※串原発電所(出力:6,000kW) 竣工
		●東邦電力株式会社創立

このように、電灯電力の急増により木曾川、矢作川の水力開発に力を入れ始める中、名古屋電灯は1920(大正9)年に奈良に本拠を持つ関西水力と合併、翌年、関西電気(株)に改称した。この時点で桃介は辞任し、代わって九州電灯鉄道の伊丹弥太郎が社長に、松永安左エ門が副社長に就任した。そして1922(大正11)年に福岡に本社を置く九州電灯鉄道と合併した。

東邦電力株式会社は、1922(大正11)年5

月に発足したが、この社名は一般公募し、東邦電力株式会社とすることを決め、本社を東京丸の内の東京海上ビルに移転した。東邦とは「東の邦」すなわち日本を指し、「光は東方より」という意味も込められている。ここに一地域の電力会社ではなく資本金1億3千万円、供給区域1府11県(愛知、岐阜、静岡、三重、京都、奈良、山口、福岡、長崎、佐賀、熊本)にわたる日本有数の電力会社となった。

(寺澤 安正)